

INTERMIND

INTERMIND

作者名 .. 八尋美玲

「INTERMIND」・登場人物表

清水	麗蘭	(18)
楠	穂乃果	(17)
鈴木	悠人	(17)
誠司		(37)
結衣		(28)
拓斗		(21)
加藤	孝宏	(34)
校長		(56)

高校3年生。
高校3年生。麗蘭の親友。
高校3年生。NCのサイバー部隊所属。
プログラマー。NCのサイバー部隊所属。
違法チップを取り扱う。NCに協力している。
情報屋をする大学生。NCのサイバー部隊所属。
麗蘭の担任教師。
麗蘭の通う高校の校長。

「INTERMIND」・内容紹介

舞台は2099年日本。脳に人工知能搭載のチップを埋め込むことが努力義務化されている日本では、国民の7／8割がチップを埋め込み済みという、世界でも上位に入るチップの普及率を掲げている。しかし、国内にはチップ反対派の人々も存在し、チップの埋め込みを促進したい政府と反対派の国民で大きな対立関係ができている。そのため、全国各地で反対派によるデモや暴動が日常的に起きている。そんな日本で生活している高校3年生の清水麗蘭は、チップを埋め込んでいる側の人間である。彼女は過去に起きた、国民のチップの動作を司る中心である「東京サーバー」が攻撃されるテロの被害者であるが、奇跡的に回復し、今は問題なく生活することができている。彼女は、変わらない日常を過ごしていた。

しかし、ある時のチップの定期アップデートを機に日常が変わった。街中からデモ隊が消え、身の回りのチップ反対派の人は、皆チップに肯定的なことを言い始め、メディアがチップに関する悪印象な情報を出すことが明らかに減った。それに対して違和感を感じていた麗蘭の様子に気がついた同級生の鈴木悠人は、彼女に声をかける。彼も世間の様子がおかしいと感じていることを告げられるが、同時に彼から今回のアップデートで国民のコントロールを試みるようなプログラムを政府が追加したと言う情報が手に入ったことも告げられる。そんな悠人から、政府のこの悪事を国民に暴いて日本を変える作戦に協力を求められる麗蘭。協力することを決めた麗蘭は彼と彼の仲間とともに日本を変える作戦を執行する。

テレビで朝のニュース番組がやっている。清水麗蘭は黙々と朝食を食べながらテレビの音声に耳を傾けている。

アナウンサー(N) 「NCによる東京サバーバーテロ、5・14から今日で5年。東京サバーバーは未だ完全復旧までは行かず、2年前に完成した仮サバーバーが国民のチップを管理している状態にあります。多くの被害者を出したこのテロ。5年経った今でも、多くの被害者が後遺症に悩まされています」

麗蘭 「ごちそうさまでした」

麗蘭は朝食を食べ終え、立ち上がる。テレビからはテロについての話が流れ続けている。

麗蘭は歯磨きをし、髪と服を整え、満足げに鏡の中の自分を見てから玄関へ向かう。

麗蘭 「いってきます」

麗蘭は家を出る。

2. 通学路 朝

通学路を歩く麗蘭。通学路ではいつものようにデモ隊の行進が行われている。麗蘭はデモ隊の出す大きな声に何も反応せず淡々と学校へ向かう。

3. 教室 朝

学校に到着する麗蘭。教室に入り、席に着く。楠穂乃果が麗蘭の姿について寄ってくる。

穂乃果

「麗蘭おはよう！」

麗蘭

「おはよ」

穂乃果

「ねえねえ、今日って5・14から5年らしいじゃん？もう朝からどこもかしこも5・14、5・14ってうるさくて嫌な気持ちになっちゃったんだよね。」

麗蘭

「……」

穂乃果

「だからさ、この話、今日二人の間では無しにしよ？絶対今日の集会とかで色々話聞かされてうんざりすると思うし」

穂乃果はお袈裟にため息をつき、麗蘭の机に腰掛ける。

二人は他愛ない会話に花を咲かせる。

朝のHR開始のチャイムが鳴る。それと同時に担任教師が教室に入ってくる。

加藤

「よし、席につけー。朝のホームルーム始めるぞ」

生徒たちが皆自分の席に戻っていく。穂乃果も麗蘭に手を軽く振った後自分の席に戻っていった。

加藤

「えーまず今日の連絡事項としては、昼に全校集会がある……ことぐらい……だな。生徒指導の先生が毎度のように身だしなみについてしつこくいつてくると思うから教室出る前に整えとけよ」

「。あとは……、多分5・14関連の話がされると思うから、まあ、聞くのがきつい人は他のことでも考えながら聞き流してもいいと……俺は思ふかなあ」

やはり5・14関連の集会だとわかり、目を伏せる麗蘭と、不機嫌そうな顔をする穂乃果。

加藤

「今日の連絡は以上。じゃあ1限の準備でも始めてくれ」

生徒たちは各々動き出す。麗蘭はじつと席に座ったまま、下を向いている。穂乃果はその様子に気がつくが、気まずそうな顔をして自分の作業を始める。

4.

体育館 昼

チャイムが鳴る。全校集会のために体育館に集められた生徒たち。麗蘭は憂鬱な表情で体育座りをしている。

校長

「皆さん、今日は2099年5月14日です。そう、あの5・14から5年が経ちました。私たち日本国民の大多数が頭に埋め込んでいるチップを司る東京サーバーが、チップ埋め込み反

対派の過激派組織『Non Chip』によって攻撃され、サーバー施設は崩壊、サーバー本体も全壊し、多くの人々のチップの機能に被害を与えました。被害を受けた方の中には意識を失ったままの方や亡くなった方もいて、本当に甚大な被害をもたらした事件です…」

校長の話は続いている。麗蘭の回想が始まる。

麗蘭(N)

「5・14。あの日の私は中学1年生。チップを埋め込める年齢になり、そしてチップを埋め込んで間もない時だった。チップを埋め込んだことに喜んでいたのも束の間、NCによる東京サーバーテロが起きた。日本の中心となるサーバーが攻撃されたことによって、多くの国民が被害を受けた。私もその被害者の一人だ。そのテロによって私は意識を失い、そしてそのまま2ヶ月間意識が戻らなかった。目が覚めたら病室のベッドの上において、外では蟬が鳴いていた。幸い、目覚めた後は順調に回復し、最後の検査では身体にもチップにも異常は検出されず、すぐに退院することができた。…まあ、このことは誰にも言っていないけど。」

回想終わり

校長

「…あの日から日本は大きく変わりました。チップ埋め込み反対派の人々の活動が活発になり、デモや暴動が増え、今でもそれは収まっています。皆さんもそれぞれチップに対して思

うことはあると思いますが、メリットもデメリットもうまく受け止めていくしかありません…
今は…。未来を担う皆さんがこれから先の日本をどう捉えるか。どう動かしていくか。期待していますよ。では、お話を終わります。」

校長は生徒たちを期待の眼差しで見つめる。そして一礼をして壇上から降りる。麗蘭は相変わらず憂鬱な顔をしている。

ため息をつき、靴を履き替え外へ出る麗蘭。後ろから穂乃果が追いかけてくる。

穂乃果 「麗蘭あー！待ってよー！もおー私が勝手にトイレ行ったからって置いてかないでー！」

麗蘭 「あ…ごめん…気づかなかった…。」

穂乃果 「まあいいよ、帰ろ帰ろ！」

校門を出て帰路につく二人。

穂乃果

「はぁ…。ただでさえNCがいつまた動き出すかわからない恐怖で毎日怯えてるのに、今日は5月14日ってことでさらに重い話されて…激鬱だわ…。仕方ないけどさぁ…。」

麗蘭

「……。」

穂乃果

「確かにわかるよ？チップ埋め込みに反対する気持ち。私もそう思うもん。でもさぁ？！NCの人たちはチップ激推しの政府に反抗するぞってなってるんで大事なサーバー攻撃しちゃうかなあ？被害者出るのなんて分かりきったことじゃん！…なんて、もう起こったことに文句言っても何も変わらないんだけどね。」

麗蘭

「何も変わらない…か…」

麗蘭と穂乃果は無言で歩みを進める。進んでいくと路上で演説をしているチップ埋め込み反対派だと思われる団体がいた。それを横目に通り過ぎていく二人。

麗蘭

「あんなことしても意味ないのに。」

穂乃果

「ねー。政府なんて私たちの意見なんて聞いちゃいないし。」

麗蘭

「穂乃果はさ、どちらかというとチップ反対派？」

穂乃果

「えっ、まあ、うん、そうかな。NCの人たちほど過激になる理由はわからないけど、チップ入れてから便利などもある反面、何だかプライバシーとか守られてるのか心配になるし、思考とか抜き取られてるんじゃないのとか思っちゃったりで、あんまり良くない気がするんだよね。まあ、流石にそこまではないと思うけどさ。」

麗蘭

「ふーん」

穂乃果

「そういう麗蘭はどうなの？」

麗蘭

「チップ埋めて良かったなんて思ったことない…かな。反対派。」

穂乃果

「やっぱそうだよねー。」

麗蘭

「もう今の日本、反対派の人が大多数じゃない？」

穂乃果

「そんな気がする！」

麗蘭

「世も末だね。」

二人で顔を見合わせ笑い合う二人。

穂乃果

「んじゃ、また明日〜！」

麗蘭

「またね。」

穂乃果と別れ、麗蘭は自分の家に向かう。

7.

家 夜

夕食を終え、風呂に入り、歯磨きをし、寝る準備万端の麗蘭は自室のベッドでくつろいでいる。手元の小型電子端末でニュースを見ている。

アナウンサー

「…続いては、定期アップデートに関するニュースをお伝えします。5月17日日曜日午後11時30分から5月18日月曜日午前0時にかけて、チップの定期アップデートが行われます。今回のアップデートでは、復旧途中の東京サーバーの代わりに稼働している東京サブサーバーに新たに搭載された人工知能システムにチップが対応します。また、前回の定期アップデート後に報告された不具合が修正されます。今回のアップデートではシステムが大幅に更新されるため、アップデート時は安静に過ごすことが推奨されており…」

麗蘭

「日曜の夜にアプデか…」

ため息をついて端末の電源を切る麗蘭。仰向けになり目を瞑る。そのまま眠りにつく。

8.

家朝

ベッドから起き上がり、制服に着替え、朝ごはんを食べ、歯を磨き、髪と服を整える麗蘭。

麗蘭

「いってきます。」

家を出る麗蘭。

9.

いつもの1日

いつもと変わらない風景、デモ隊の横を淡々と歩き登校する麗蘭。そしていつものように、教室についたら穂乃果が麗蘭に話しかけてくる。朝のHRが終わり、授業が始まる。昼食の弁当を食べ、午後の授業を受ける。そして、帰りのHRが終わり、生徒

10.

家
夜

たちは皆教室から出ていく。麗蘭と穂乃果も教室から出て、帰路に着く。デモ隊の横を通り過ぎ、麗蘭は穂乃果と別れ、自分の家へ向かう。

11.

家
夜（日曜日）

夕食を終え、風呂に入り、歯磨きをし、寝る準備万端で自室のベッドでくつろぐ麗蘭。手元の小型電子端末でニュースを見ている。やがて時間が経ち、眠気に負けて端末を持ったまま眠りにつく。

時間は進み、定期アップデート当日。時刻は午後11時28分。麗蘭はベッドに仰向けに寝そべっている。午後11時30分。端末の通知音を合図に目を瞑る麗蘭。いつときして、再び通知音が鳴る。目を開けて起き上がる麗蘭。端末にはアップデート完了の文字が表示されている。安堵したような顔をして再び寝転がり、そのまま眠りにつく。

12.

家朝

朝起きて、制服に着替える麗蘭。食卓につき、朝ごはんを食べ、歯を磨き、鏡の前で髪と服を整え、満足そうに鏡の中の自分を見つめる。いつものルーティン。

麗蘭

「いってきます」

麗蘭は家を出る。

13.

通学路 朝

いつもの道を歩いていく麗蘭は違和感に気がつく。

麗蘭

「えっ…?」

毎日いるはずのデモ隊がない。あまりの通学路の静けさに驚いて歩みを止め、あたりを見渡す麗蘭。

麗蘭(M)

「なんでいきなり…?」

麗蘭は学校に向かって走り出す。

14.

教室 朝

麗蘭

「穂乃果！」

教室に着いた瞬間に穂乃果の元へ駆け寄る麗蘭。

穂乃果

「あ、おはよう！どしたの？」

麗蘭

「いつも絶対いるはずのデモ隊がいなかった。」

穂乃果

「あー、いつも言ってる人たち？」

麗蘭

「そう。」

穂乃果

「まあ、ずっとやってたばいから一旦休憩って感じじゃない？」

麗蘭

「まあ…確かに…そうかも…。」

穂乃果

「そんなに気にすることないよー！」

ふふふと笑う穂乃果。

穂乃果 「まあ世の中の反対派の人たちはよくやってるよねー。もう今更何やっても変わらないのに。」

麗蘭 「そうだけど…」

穂乃果 「だって、チップのおかげでこんなに世界は進化したし、便利なことも増えたし、日常生活も勉強も楽になって。今更何をダメだやめろいけないことだと叫んでるのかしら！」

麗蘭 「…は？」

穂乃果の言葉に耳を疑う麗蘭。思わず声が漏れる。

麗蘭 「穂乃果？え、チップについてプライバシーがどうのこうのとか言って嫌ってたのに？な…何？急にどうしたの？」

穂乃果 「え？そうだったっけ？」

チャイムが鳴る。担任の加藤が教室に入ってくる。

加藤 「さーお前ら、席に着いた着いたー。」

各々席に戻っていく生徒。麗蘭も仕方なく穂乃果のもとを離れ席に着く。

加藤
「よし、朝のHR始めるぞー。おつ、そういえば昨夜のアプデ、特に問題なくできたか？体調とか大丈夫かー？」

頷く生徒たち。

加藤
「よし、なら大丈夫だ。今日の連絡事項としては、中間テスト期間がもう少しでスタートするから職員室に入るのが制限されるぞーってことぐらいだな。今日の連絡は以上。」

生徒たちは次の授業の準備を始める。麗蘭は再び穂乃果の元へ向かう。

麗蘭
「穂乃果、さっきの続きなんだけど…」

穂乃果
「ん？」

麗蘭
「穂乃果、前と言ってること違くなかった？」

穂乃果
「何が？」

麗蘭
「その…チップのこと嫌ってたのに、なんか…別にそうでもなくなったみたいな感じがして…」

穂乃果

「そうかな？まあそれより早く1限の準備しないと…やばっ、移動教室じゃん！」

そう言ってそそくさと準備を始める穂乃果。違和感を拭いきれない麗蘭は納得しない様子で授業の準備を始める。

15.

通学路 夕方

穂乃果

「じゃっ、また明日ー！」

麗蘭

「うん…。」

いつもの分かれ道で別れる麗蘭と穂乃果。麗蘭は歩きながら、あたりを見渡す。やはりデモ隊の姿は見えず、静かな通学路である。

麗蘭(M)

「なんか、今日は変な感じだったなあ。」

トボトボと歩いて帰る麗蘭。

朝起きて、着替え、朝食を食べ、歯を磨き、髪と服を整え、家を出る麗蘭。今日もデモ隊はいない。学校に着くが、穂乃果は他のクラスメイトと話している。教室の背面黒板にはチップ反対活動を行う生徒組織が作ったポスターが貼られている。

次の日の登校の道のりにもデモ隊はいない。教室に着くと背面黒板に貼っていたポスターが剥がされていた。ふとゴミ箱を覗くとそのポスターが捨てられている。

また次の日、通学路にデモ隊はいない。学校につくと、反対活動を行う生徒組織の一人らしき生徒が他の生徒たちに言い寄られて怯えていた。

翌る日も翌る日もデモ隊はいない。学校ではチップ反対派として活動する生徒はいなかった。

変わっていった周りの雰囲気についていけない麗蘭は、高校の中庭のベンチで一人昼食の弁当を食べていた。

麗蘭(M) 「おかしい。最近明らかに周りの人間のチップ反対派の人間に対しての当たりが強くなってる気がする…」

ため息をつく麗蘭。無表情で黙々と弁当を食べ進める。そこを通りかかった鈴木悠人が麗蘭に話しかける。

悠人 「ねえ、君。大丈夫？」

麗蘭は顔を上げる。

麗蘭 「…え。なんですか。」

悠人 「すごい神妙な面持ちでご飯食べてるから。」

麗蘭 「あ…そうですか…。」

悠人

「確か、隣のクラスの麗蘭さんだね。清水麗蘭さん。」

麗蘭

「あ、そうです。えっと、名前…知らない…」

悠人

「鈴木悠人。」

麗蘭

「悠人、さん。」

悠人

「違和感あるでしょ？最近の身の回りの変化に。」

麗蘭

「…へ？」

自らの悩みを的中された驚きで変な声が出る麗蘭。

悠人

「凶星だ。そうだと思った。」

麗蘭

「どういうこと…？」

悠人

「僕もなんか変だと思ってたから、おんなじふうに戸惑ってる人、探してたんだ。」

麗蘭

「はあ…？」

悠人

「…っていうのは嘘。君なら戸惑うってわかってたから話しかけたんだ。」

麗蘭

「私なら戸惑う……ってどういうこと？」

悠人

「…。」

急に黙り込む悠人。

麗蘭

「えつ、あの、本当にいきなりで意味がわからないんだけど。」

悠人

「…そうだね。じゃあ、順番に説明する。まずは僕のことから。」

そう言って麗蘭の座っているベンチに座る悠人。怪訝そうな顔で悠人を見る麗蘭。

悠人

「NCってわかる？」

麗蘭

「えつ、まあ、それはもちろん…。『Non Chip』でしょ？あの過激派組織の。」

悠人

「そう。僕はその一員。」

麗蘭

「は？」

悠人

「でも直接的に暴動や事件に関わっているわけではない。一応サイバー部隊に所属していて、間接的には関わってるけど。」

麗蘭

「えつ、じゃあ犯罪者じゃ…？」

悠人 「まあ、そこは置いといて。チップ埋め込みに反対する立場として、最近の周りのみんなの言動や行動がおかしいと思っていた。だから、念のためにこの前の定期アップデート後のサーバーと何人かのチップにアクセスしてみたんだ。」

麗蘭

「アクセス…？勝手にのぞいたってこと？そんなことできるの？」

悠人

「まあ、違法アクセスではあるけど…。そこも置いておいて欲しい。で、アクセスした結果、こんな結果が出たんだ。」

悠人が端末を取り出し、アクセス結果を表示させ麗蘭に見せる。

麗蘭

「いや、全然わからないけど…何これ。」

悠人

「単刀直入にいうと…」

悠人は麗蘭に耳を貸せというジェスチャーをする。そして麗蘭の耳元で囁く。

悠人

「政府がみんなを操るようなアップデートを行なったってこと。」

麗蘭は驚き、目を大きく見開いて悠人の方を向く。悠人はいたって真面目な顔をしている。

麗蘭

「操るって…つまり国民のチップに対する考え方を矯正するアプデだったってこと？」

悠人

「そう。」

麗蘭

「じゃあ私は？何も変わってない気がするけど…」

悠人

「それが君に話しかけた理由。」

麗蘭

「…？」

悠人

「君のチップにはアップデートが適用されていない。」

麗蘭

「え…どうして？」

悠人

「チップに不具合があるらしい。…麗蘭さん。過去にチップに重大なダメージを受けたことがあるでしょ。」

麗蘭

「…なんでそれを…」

悠人

「君のチップにもアクセスしたんだ。」

驚きで空いた口が塞がらない麗蘭。言葉が出ない。

悠人 「本当にごめん。でも、この事態をどうにかするためには、君みたいな今回のアプリの影響を受けていないチップ埋め込み済みの人が必要だったんだ。」

麗蘭 「でも…でも！私、退院した時、何もチップに異常は検出されなかった。これまでのアプリには対応してきたし…」

悠人 「まあ、運が良かったってことかな。」

麗蘭 「…。」

二人の間に沈黙が流れる。その時、昼休みが終わる5分前のチャイムが鳴る。

悠人 「君には協力してもらいたいことがある。あとでまた話がしたい。放課後、またここにきてくれる？」

麗蘭 「え、はい…」

悠人 「じゃあ、また後で！」

そう言って小走りで去っていく悠人。麗蘭はポカンとした顔でそれを見送る。ふと自分も教室に戻らないといけないことを思いだし、麗蘭も小走りで教室に向かう。

昼と同じベンチに向かう麗蘭。悠人がすでにベンチに座って麗蘭を待っていた。

「昼ぶりだね。」

「…協力してもらいたいことって何。」

「簡単に言えば、今の政府を潰すことかな。」

「はあ?! 潰すって…」

「潰す、というよりか、今回のアブデの秘密を全国民に暴いて、人々の政府に対する不信感を増大させ、国民みんなが今の政府を崩して新しい日本を作るってところかな。」

「そんなことに私が協力する意味なんて無くない?」

「いや、あるんだ。むしろアブデが適用されなかった君が適任なんだ。」

「それってどういうこと…?」

悠人

麗蘭

悠人

麗蘭

悠人

麗蘭

悠人

麗蘭

悠人 「僕たちNCの構成員は大多数がチップ埋め込み済みの人間だ。でもその構成員たちは、やはり今回のアプデで思想がガラリと変わってしまった。だから今のNCには僕のようなチップを埋め込んでいない人間しかいない。」

麗蘭

「チップ…埋め込んでないの…？」

悠人

「うん。でも、やはりサーバーとのやり取りができるチップ埋め込み済みの人がいないとできないこともある。そんな時に、アプデが適用されていない君を見つけた。」

麗蘭

「…。」

悠人

「君のチップの不具合は政府の奴らからしたら『異常』かもしれない。でも、僕ら国民にとっては『自由』を手にするための鍵なんだ。」

悠人は手を差し出す。

悠人

「協力してくれないか。」

戸惑う麗蘭。目を瞑り、深呼吸をする。そして、意を決したように悠人の手を握る。

麗蘭

「わかった。」

悠人

「ありがとう。」

悠人は優しく微笑む。

悠人

「明日から準備を始めよう。また明日の昼休みにここで待ってるから。じゃあ！」

そう言つて手を振りながら去っていく悠人。麗蘭はとんでもないことに巻き込まれ混乱する反面、これからのことに少しワクワクしている気持ちもあり、表情は少しニヤついていた。そして麗蘭も帰路につく。

19.

中庭 昼

悠人

「あつ、やつほー！」

麗蘭

「今日から何するの。」

次の日の昼。昨日と同じベンチに座っている悠人。ノートパソコンを膝に乗せ、作業をしていた。昼ごはんの弁当を持った麗蘭はベンチに座る悠人の姿を見つけ駆け寄る。

悠人

「今日は作戦のざっくりとした流れを考えていくつもり。」

麗蘭

「ほう。」

悠人

「中庭は本当に人いないから大丈夫だとは思うけど、他人には聞かれないようにね。あと、言わないでね、誰にも。」

麗蘭

「もちろん。」

悠人

「よし、じゃあ今のところまで考えた作戦を発表します。」

悠人はそう言ってパソコンの画面を麗蘭に見せながら説明する。

悠人

「とりあえず最終的には、東京サーバーをハッキングして、合法的な方法ではあるけど僕らのアップデートを全国民に適用させて、みんなを元に戻すのが目標。それと同時に、今回政府がどんなことをしかしたのかを日本国民に知らしめる映像を全国的に配信する。そうすることで、みんな政府がヤバいことに完全に気が付く。そうして今の政府を倒す基盤を作る…って感じ。OK？」

麗蘭

「OK？つて…そんな軽いノリで言うことではないと思うけど…。なんとなくOK。」

悠人 「まあ、問題はこの最終目標に辿り着くまでに何をする必要があるかまだ考えきれていないところなんだけど…。」

パソコンを閉じたため息をつく悠人。

悠人 「まずは、政府がやった今回のアップデートについての正しい情報が少なすぎるかな。僕が手に入れたのはあくまでもプログラムを解析した結果だけで、政府が意図的にこのアップデートを行なったのかどうかはつきりする資料…みたいな証拠が足りない。」

麗蘭 「ふーん。」

悠人 「多分、東京サーバーを管理する政府所有の施設とかに侵入して探すかなさそうだね。」

麗蘭 「し…侵入?!何言ってるの?そんなの無理でしょ…。」

悠人 「『普通の人』は、ね。」

麗蘭 「なに、『君だったらできるんだ!』なんてこと言うつもり?」

悠人 「大正解!」

麗蘭 「はあ…」

悠人 「君のチップの不具合はまた今度詳しく分析させてもらうけど、君のチップが今回の重要アツブデートをすり抜けたことは、何かしらの外部からのコントロールに干渉しにくい不具合を持っていると僕は予想している。」

麗蘭

「お堅い施設のセキュリティにも引っかけにくいかもってこと？」

悠人

「そう。最近のセキュリティは異常を検知した瞬間にその人物のチップの情報を読み取ったり、最悪その人物が体を動かせなくなるようなシステムをチップに転送…とかもあるからね。」

麗蘭

「こわ…」

悠人

「まあ、君の不具合はそういう外部からの働きかけが効きにくい可能性を秘めているってこと。」

麗蘭

「……………もしかして…、私が施設に侵入する担当?!」

悠人

「ピンポーン！」

麗蘭

「いやいやいや、無理無理。」

悠人

「僕がセキュリティ系のシステムをハッキングしてサポートするから大丈夫。」

麗蘭

「大丈夫って…。無責任だな。」

悠人

「本当はパパと政府の情報を管理する何かからその情報を抜き取る…とかができたらいいんだけど…」

麗蘭

「できないの？」

悠人

「こういう時のアナログ方式。紙に記録してるんだよ。簡単に電子データとして抜き取られないように。もう2099年なのね。」

麗蘭

「なるほど。」

悠人は立ち上がり、麗蘭の方を向く。

悠人

「今日の放課後って暇？」

麗蘭

「まあ…暇かな。」

悠人

「今回の作戦に協力してくれる僕の仲間を君に紹介したいんだ。放課後、昇降口で待ってるから帰りのHR終わったら来て。」

そう言って悠人はすたすたと校舎の方に帰っていった。すっかり弁当を食べるのを忘れていた麗蘭は、急いで弁当を口にかき込む。

加藤

「…んじゃあ帰りのH Rは以上。気をつけて帰れよー。」

帰りのH Rが終わり、麗蘭は昇降口へ向かおうと席を立つ。すると、穂乃果が麗蘭の方に向かってくる。

穂乃果

「麗蘭！今日は一緒に帰ろ〜？」

麗蘭

「えっ、ああ…ごめん。今日用事があつて…」

穂乃果

「あつ、そーなの？ざんねーん…。また今度一緒に帰ろうね！」

麗蘭

「うん…。」

穂乃果はすぐに他のクラスメイトの元へ行き、教室を出ていった。考え方が変わってしまった穂乃果に抵抗感を覚えていた麗蘭は、久しぶりに話しかけられて緊張してし

まった自分に嫌気がさして苦い顔をする。昇降口向かうとすでに悠人が立っていた。
麗蘭に気づいた悠人は小さく手を振る。

悠人 「じゃあ行こうか。」

麗蘭 悠人についていく麗蘭。

麗蘭 「どこいくの？」

悠人 「僕の家。」

麗蘭 「は?!」

悠人 「他のNCメンバーとちゃんと通信できる環境が家にしかないんだ。」

麗蘭 「ええ…あのう…親御さんは…?」

悠人 「両方とも仕事で深夜までいないよ。」

麗蘭 「ええ…。」

悠人 「気にせず気にせず!!」

20分ほど歩いて悠人の家に到着する。マンションの12階の一室が悠人の家であった。

21.

悠人の家
夕方

悠人

「こっちこっち！」

さつさと靴を脱ぎ、自分の部屋に手招きする悠人。

麗蘭

「お…お邪魔します…。」

麗蘭も躊躇いながらも靴を脱いで、家にかかる。そして手招きされる部屋へ向かう。
部屋に入った麗蘭は、部屋に広がる様々な機械の量に圧倒される。

麗蘭

「なん…じゃこりや…。」

悠人

「これゼーんぶNCの活動に必要な設備。まあいいからここ座って！」

麗蘭は悠人の指差した大きめなデスクチェアに腰をかける。目の前にはたくさんの画面が広がる。

悠人 「一応仲間には連絡しておいて、今から軽く顔合わせと話ができるように手配はしてるんだけど…。あつ、連絡きた…。接続するね。」

麗蘭の横から体を乗り出しパソコンの操作をする悠人。すると画面に男性が二人、女性が一人体映る。一人の男性が早速話し始める。

誠司 「やあやあ！悠人くん、その子が協力してくれるって言ってた子かい？」

悠人 「どうも、誠司さん。その通りです！」

結衣 「政府の配布するチップを埋め込んでるのに、不具合でアプリが適用されなかったって子よね？どんな不具合なのか分析したいわぁ…ふふふ」

悠人 「また今度それはあなたに頼みますから今は一旦…」

拓斗 「…ども。」

次々と喋り出す画面の中の彼らに困惑する麗蘭。そんな麗蘭に気がついた悠人は、麗蘭に自己紹介するようにジェスチャーで促す。

麗蘭 「あつ、えっと、清水麗蘭です。悠人さんと同じ高校の3年生です。よろしくお願いします…。」

画面の中の誠司と結衣は、「おー」と言いながら拍手している。拓斗は無言で画面の前で微動だにしない。あまりにもアットホームな雰囲気さらに困惑する麗蘭。そんな麗蘭に対し、悠人は画面を指差しながらそれぞれの人の説明する。

悠人

「このおじさんは誠司さん。一応プログラマーをやってるから、色々できるよ。」

誠司

「おじさんなんて言わないでくれよ」

悠人

「で、この人が拓斗さん。大学生。情報収集に強い人です。」

拓斗

「…うす。」

悠人

「で、この女の人が、結衣さん。一番やばい人。」

結衣

「やばいって何よ」

悠人

「違法チップ売り捌いてる闇取引の女王様だよ、この人。」

麗蘭

「違法チップ…？」

結衣

「んもーこんなピュアな子に教えちゃだめよ。…まあ、実際そう。一部の機能に制限をつけたり、拡張機能をつけたりしたチップを作ってる。チップの改造は法律で禁じられてるけどね。」

やばそうな人と関わりを持つかもという心配で胸がいつぱいの麗蘭は、声を出せずにあんぐりと口を開けていた。

悠人

「まあまあそんな心配なさらず。」

麗蘭

「本当に心配なんだけど。」

悠人

「大丈夫。違法なことをしてまでどうにかしなきゃいけないチップを作り出してる今の日本がダメなだけだから。」

麗蘭

「…。」

悠人

「ということで、御三方、お集まりいただきありがとうございます！今日は麗蘭さんも含めて五人で作戦会議をしたいと思いますので、よろしくお願いします。ではまず…」

そうやって説明をし始める悠人。麗蘭を除く四人の間では、意味のわからないカタカナの単語や、難しい用語が飛び交う。訳もわからずそこにいるだけの麗蘭はこくりこくりと居眠りを始める。そして、そのまま眠りについてしまう。

悠人 「…らさん、麗蘭さん〜！」

麗蘭 「ん…うーん…」

悠人 「あ、起きた。」

麗蘭 「あ。」

いつの間にか居眠りしてしまったことに今気がつく麗蘭。いつの間にか話し合いも終わっていたみたいで、画面にはもう三人の顔が表示されていない。

麗蘭 「うっ…ごめんなさい…」

悠人 「大丈夫大丈夫！こっちで話進めてまとまってきたよ。君にはまた説明するから。そろそろ帰ったほうがいい時間かもね。」

麗蘭が部屋の時計を見ると、時計は午後7時を指していた。

麗蘭

「やっぱ、ほんとだ。家帰んなきゃ。」

悠人

「家までの道わかる？」

麗蘭

「調べるから大丈夫。」

悠人

「そっか。じゃあまた明日、昼に中庭で。」

麗蘭

「うん、わかった。」

そう言つて玄関に向かう麗蘭。

麗蘭

「お邪魔しました。」

悠人

「気をつけて帰ってね。」

悠人の家を出る麗蘭。端末で帰宅ルートを調べ、帰路につく。

次の日、昼休みに中庭に向かうと前と同じベンチに悠人が座っている。膝の上にパソコンを乗せ、作業をしている。

「ごめん、お待たせ。」

「お、来た来た。じゃあ、早速昨日の作戦会議の内容を説明していい？」

「うん。」

「前に話した最終的な目標が、こちらで用意したアップデータを国民に適用させることと、真実を伝える内容の映像を配信すること…っていうのは覚えてる？」

「なんとなく…。」

「で、とくに映像配信する際に提示する確たる証拠をまだ手に入れてないということも覚えてる？」

「うん。」

麗蘭

悠人

麗蘭

悠人

麗蘭

悠人

麗蘭

悠人

「その証拠のありかについて昨日話してたんだけど…」

そう言って悠人はパソコンの画面を麗蘭に見せる。そこには何かの建物の構造の図が表示されていた。

悠人

「これが拓斗さんが手に入れた、東京サーバーの施設内地図。一般に公開していないところまで書き込まれてるものらしい。…多分5・14の時に当時のNCが施設に侵入したり、重要なものを攻撃したりする際に参考にしたやつだと思う。」

パソコンを操作し、とある部屋を大きく表示させる悠人。

悠人

「で、拓斗さんが手に入れた情報によると、この地下の一角、ここがサーバーのアップデートや国民のチップのアップデートに関する資料を保管する部屋らしい。」

麗蘭

「じゃあ私がここに行って、資料を探し出せばいいってこと？」

悠人

「その通り。」

麗蘭

「私一人じゃそんなことできない…」

悠人

「結衣さんも一緒だよ。」

麗蘭

「え？でも、チップつけてる人はセキュリティを抜けるの難しいんじゃない？」

悠人

「もちろん、彼女のつけてるチップは改造済みさ。」

麗蘭

「…なるほど。」

悠人

「そしてこれがその部屋の内部の様子。とにかくたくさんの資料が置かれてる。」

麗蘭

「この中から探すの？！」

パソコンには大量の資料が保管されている資料室が表示されていた。

悠人

「おそらくこれらは相当過去の資料。最新の資料は別に分けられてると予想してる。」

麗蘭

「それはどこかはわからない…？」

悠人

「ごめん。そこまではわからなかったんだ。でも結衣さんがいれば、多分大丈夫。」

麗蘭

「大丈夫…かな。」

悠人

「まあ本人に会えばわかるよ。」

麗蘭

「わかった。」

悠人はパソコンを閉じる。

悠人

「よし、説明は終了！ 決行は今週の土曜日。当日までに一回は結衣さんに会っておいてもらいたいから、どっかの放課後空けておいてくれないかな？ 一応、僕の連絡先渡しておくから、また空いてる日教えてよ。」

そう言っただけで悠人はアドレスの書かれたメモを麗蘭に渡した。

悠人

「あいにく僕はチップ埋め込んでないからね。チップ間の簡易メッセージ交換機能も使えないから、これで許してね。」

そう言っただけで悠人。去っていく悠人を見送り、メモに目を落とす麗蘭。メモには電話番号が書かれていた。

麗蘭(M) 「結局メモをもらった昨日の夜に連絡した。そしたら、今日の放課後の集合場所を口頭で伝えられたけど…」

麗蘭の手には電話で伝えられた場所の住所をメモした紙が握られている。端末の地図機能を見ながら住所通りの建物に到着した麗蘭は顔を上げる。目の前にあったのはバーであった。クローズの看板がかけてある。

麗蘭 「ここ…？高校生が入っているのかな…？」

周りをキョロキョロして人がいないことを確認して店に入る麗蘭。ドアは開いていて、開けるとカランと店のドアのドアベルが鳴った。

結衣 「あら、麗蘭ちゃん。いらっしゃい。」

バーカウンターの客席に座っている結衣が振り向いて笑顔で麗蘭を迎える。結衣と麗蘭以外、店内には誰もいない。

結衣 「今日は来てくれてありがとう。さあ、奥の部屋に来て。」

麗蘭 「奥の部屋…」

結衣はバーカウンターの中に入っていく、後ろの酒の瓶が並んだ棚を動かす。

結衣

「ジャン！隠し扉～！」

麗蘭

「古典的ですね…」

結衣

「あれ、そんなに驚かなかったか。まあいいや、おいで。」

そのまま扉の中へ入っていく二人。扉の先にはたくさんの機械と施術台があった。

結衣

「今日は施設への侵入経路とやるべきことを頭に叩き込む会よ。」

そう言いながら結衣は紙に印刷されたサーバー施設の地図を取り出し、机に広げる。

二人はその地図を覗き込む。

結衣

「これ、多分悠人があなたにもう見せたやつと同じものよね？」

麗蘭

「はい。」

結衣

「じゃあ、話が早いわ！では早速なんだけど、施設の入り口がここで…」

そう言って説明を始める結衣。地図を指でなぞったり、時折部屋のディスプレイに情報を表示させながら説明を進めていく。麗蘭も夢中になっている。ふと結衣が思い出したようにハッとした顔をし、ニヤニヤとしながら麗蘭の方を向く。そのまま施術台

まで背中を押されて連れて行かれ焦る麗蘭。施術台に寝転がるよう催促され寝転がった麗蘭は、こめかみにコードのつながったパッドを数枚貼られる。結衣は興味深そうにコードが接続された機械のディスプレイを見ている。そして、麗蘭のチップの不具合の具体的な内容について麗蘭に告げる。そんなこともわかるのかと感心した顔をする麗蘭。その後も話し合いは続き、やがて夜になった。

結衣 「ふう…じゃあこんなもんな。当日動けそう？」

麗蘭 「できる限り頑張ってみます。」

結衣 「さつきも言った通り、あなたのチップの不具合でしか抜けられないセキュリティが目的地の付近にある。その手前からあなただけの単独行動になるけど、そこももう大丈夫ね？」

麗蘭 「不安はあるけど…大丈夫です、多分…。」

結衣 「うまく持ち出せたら半分勝ちね！頑張るわよ！さ、遅くなる前に帰った帰ったー！」

麗蘭 「ありがとうございました。」

結衣 「じゃあ当日の夕方にね！」

入り口のドアを開き店を出る麗蘭。カランとドアベルが鳴る。

資料を持ち出す作戦決行日当日。麗蘭は小走りで結衣のバーに入る。中に入ると、悠人と誠司と結衣の三人がバーカウンターに座っていた。

結衣
「あ、来たわね。」

結衣は麗蘭に手招きして、奥の部屋に誘導する。4人は部屋の中に入っていく。

悠人
「僕と誠司さんは施設のセキュリティシステムのハッキングを頑張るからよろしく。それから、施設に侵入する二人には、チップを通して情報や指示を送るから、それに従ってくれるとありがたい。」

麗蘭
「わかった。」

結衣
「じゃあ早速私たちは向かうわよ。」

麗蘭
「…っはい！」

予想より出発があまりにも早いことに焦りつつ、麗蘭と結衣はバーを出る。結衣は手に持っている二つのヘルメットのうち一つを麗蘭に渡す。バーの横の路地裏に停めてあったバイクに乗り、二人はサーバー施設に向かう。

施設から少し離れた人通りのない場所にバイクを止め、施設の裏口の手前に辿り着く二人。裏口には警備員が二人いる。結衣は改造チップを使い、警備員の視界をジャックする。視界がおかしくなったことに困惑する警備員を横目に裏口から施設に入り込む二人。

結衣

「生ぬるいわね。」

余裕の顔を浮かべる結衣。反対に緊張で顔がこわばっている麗蘭。二人は施設内に侵入することに成功する。

悠人（無線）

「あーあー、二人とも聞こえますか？その廊下を進んだ先にある無施錠の扉の向こう側からセキュリティが厳しいエリアに入る。今からそれらを一時的にダウンさせるから、その間に通り抜けてほしい。」

麗蘭（無線）

「了解。」

そのエリアの手前で待機する二人。監視カメラの赤いランプが消えたことを確認して進んでいく。そこを通り抜けると地下への階段があった。階段を降りていくと、下から足音が聞こえてくる。すぐさま結衣が反応し、その人間に対し視界ジャックを瞬間的に行う。その瞬間に横を通り過ぎる二人。視界ジャックされた施設の職員は視界が元に戻ったあとにキョロキョロ周りを見るが、何が起きたかわからない様子でそのまま階段を登っていく。麗蘭と結衣は順調に地下に辿り着く。

結衣（無線）

「ここから先は私にはセキュリティが反応してしまうところ。私はこの階のトイレに隠れておくから、行つて！」

麗蘭は大きく頷いてすばやく動き出す。

悠人

「セキュリティシステムがダウンから回復するまであと大体3分くらい。それまでに資料室の中に入ってくれ！」

廊下を走り続ける麗蘭。

誠司

「その先のカメラのサーモグラフィーに二人分の人影を検知！手前で一旦ストップ！」

麗蘭は曲がり角の手前で身をひそめる。職員が二人、奥の曲がり角を通り過ぎていくのを確認し、再び動き出す。目的地である資料室に無事辿り着いた麗蘭は中にはいる。あたりを見渡し、資料がありそうな場所を探す。

悠人（無線）

「資料室に入れたようだね。なるべく早く資料を見つけてくれ！」

麗蘭（無線）

「わかつてるって！探してる！」

麗蘭は必死に資料室を走り回り資料を探す、それらしきものは見当たらない。すると突然、遠くでブザーのようなものが鳴り響く。

誠司

「まずい、セキュリティハックがバレた…」

悠人

「何?!」

誠司

「おそらく結衣さんのチップを検出したんだ。くそつ、どうして…」

悠人（無線）

「麗蘭さん！セキュリティのハッキングがバレた！結衣さんの方に反応したみたいだから君はまだバレてないけど、いずれ警備員が地下にも来る！今のうち結衣さんと合流して！結衣さんがいれば、なんとか彼女の改造チップの力で強引に抜け出せると思うから…!!」

麗蘭（無線）

「でも！まだ資料を見つけてない…」

悠人

「っ…いいから！今はとにかく逃げて！」

麗蘭

「わかつ…」

麗蘭は焦って資料室を出ようとする。しかし、棚に肩をぶつけてしまい、棚に置いてあった資料を床に落としてしまう。ふとその資料の表示を見ると、アップデートの記録らしきタイトルが書かれていた。それを急いで拾い上げ、資料室を出て来た道に戻る。階段付近で結衣と落ち合う麗蘭。二人は急いで階段を駆け上げるが、上から複数人の足音が聞こえ、結衣に止まれというジェスチャーをされ、止まる麗蘭。結衣は上に駆け上がると同時に視界ジャックを実行し、困惑する警備員の首の後ろを攻撃し、気絶させた。二人は地上の階まで上がってきた。階段のすぐ近くのトイレに隠れる二人。

麗蘭

「それらしき資料を見つけました！多分ここに…ほら！最新の5月17日のアップデートについて書いてある！」

資料の一番上のページに最新のアップデートの資料があることに気づく麗蘭。

結衣

「貸して！悠人たちに内容確認は任せる。私たちは安全なところに向かうわよ。」

麗蘭

「確認を任せるって…どうやって？」

結衣は自らのチップの視神経共有システムを起動し、悠人たちに目視した資料の画像データを送信する。悠人は即座にそれを確認する。

悠人（無線）

「…よし、作戦変更だ。今すぐサーバーのコアルームに向かってほしい！資料の内容はばっちり証拠になる内容だ。今から僕らのアップデータの配信の準備を行う。だから、君たちには証拠を突きつける配信を行なってほしい！」

結衣

「はあ？！いきなりすぎるわよ！第一、もう警備員たちがうろちよろしてるというのに…」

悠人

「…今引き返したところで今後の警備が頑丈になって作戦の実行が難しくなるのは目に見えてる！今やるしかないんだ！」

結衣

「…わかったわ。麗蘭ちゃん、いくよ！」

結衣は麗蘭の手を掴み走り出す。

麗蘭

「ふええ？！」

あまりにも早い結衣の走りについていくのに必死の麗蘭。警備員が二人の姿を見つけ後ろから追ってくる。

結衣

「ちっ…めんどくさいわねえ…!!」

結衣は複数の警備員の視界を同時にジャックする。そのうちに二人はコアルームへ向かって走る。警備員は視界を奪われ、うまく身動きが取れない。しかし、結衣のチップの処理が追いつかず、すぐに回復する。

結衣

「くそっ…。麗蘭ちゃん、先にコアルームに向かって！足止めするから。あとで落ち合いますよう！」

麗蘭

「でもっ…私一人じゃ何も…」

結衣

「大丈夫！すぐ向かうから！配信で何喋るかでも考えておいてっ！」

そう言っつて警備員の方に向かう結衣。麗蘭はコアルームに向かって走る。

悠人（無線）

「コアルームの入り口のロックは解除できた！施設の奴らに気が付かれてロックされてしまう前に中へ入ってくれ！」

麗蘭（無線）

「わかった！」

廊下の突き当たりがコアルーム。麗蘭は一目散にコアルームへ向かう。そしてロックが解除されて開いている扉をあけ、中へ入る。

悠人（無線）

「中から一旦扉の鍵を閉めて！」

コアルーム入り口の扉の横にある施錠装置らしきもののボタンを押す麗蘭。扉が閉まり、コアルーム内の明かりがつく。中心には操作盤と巨大なディスプレイがある。無意識にそれに駆け寄る麗蘭。

麗蘭

「えっと…何をどうすればっ…」

悠人（無線）

「結衣さんが来るまで隠れて待っててくれ！その間に僕たちはアップデートの準備を進める！」

麗蘭は巨大なサーバーが立ち並ぶ部屋の一角にしゃがみ込んで結衣を待つ。あまりにも静かな空間に麗蘭の荒い息が微かに響く。数分経ったところで、悠人から無線が入る。

悠人（無線）

「結衣さんが今そっちに向かっている！僕らの方で扉は開け閉めするから、何かサーバーを動かしていそうな機械があればそこにスタンバイして！」

麗蘭

「了解！」

麗蘭は先ほどの操作盤のもとへ走る。操作盤の前についた瞬間、入り口の扉が開く。

結衣

「麗蘭ちゃん！」

麗蘭

「結衣さん！無事でよかった…」

結衣

「あとは私に任せて。配信でしつかり真実を話す準備だけしておいて！」

麗蘭

「待つてください！私、資料まともに読んでな…」

麗蘭がそう言いかけた瞬間、麗蘭のチップが資料の内容を受信する。それを自動的にAIが要約し、話すべきことが麗蘭の脳に流れ込んでいく。麗蘭はすつと落ち着いた顔をして軽く呼吸をする。

麗蘭

「いけます。」

結衣は操作盤に手を置き、目を瞑る。操作盤のディスプレイにノイズが走る。

悠人（無線）

「アップデートの準備完了！30秒後に全国的に配信する！二人は配信を同時に始めて！」

結衣が操作盤とサーバーのハッキングを続ける。視神経共有システムを起動させ、サーバーと結衣の視界を接続する。

悠人（無線）

「始めて！」

結衣が目を開ける。麗蘭が彼女の視界に映る。結衣の視界の映像が、アップデートを
実行している国民のチップを通して人々の視界に配信される。テレビや端末などの電
子機器も悠人たちによるハッキングで全てが麗蘭の映像に切り替わる。街を歩く人々
は歩みを止め、麗蘭の映像に意識を向ける。

麗蘭は深呼吸をし、証拠となる資料を手に持ち、話し始める。

作戦実行から一週間後。麗蘭はテレビの朝の報道を見ている。麗蘭が行った配信は、
瞬く間に話題になり、ここ数日メディアもこの話題でつきっきりである。

アナウンサー

「先日、政府が意図的に国民をコントロールするシステムをチップに導入していたことが、突
如行われた配信によって判明しました。これを受け世界知能機構WIOは調査隊を日本に送る
ことを決定し、この情報の真偽を確かめるとともに、場合によっては日本政府のチップ管理権
を剥奪することを表明しました…」

無表情でテレビを眺める麗蘭。リモコンに手を伸ばし、テレビを消す。

麗蘭（M）

「あの日、私たちが作戦を実行したあと、日本は変わった。当時の政府は倒れ、新しい政府ができた。日本政府のチップの管理権は無くなり、日本の理事長を含めたW I Oの会議によってチップのプログラムの管理が行われることになった。チップの埋め込みも任意になった。また、以前は違法であったチップの取り出しも合法になり、チップに対する自由度が上がった。もちろん、穂乃果もクラスメイトもみんな元に戻った。デモ隊はいなくなり、以前より静かで平和な日常が戻ってきた。」

夏の制服を着て、朝食を食べ、歯を磨き、鏡の前で髪と服を整える麗蘭。

麗蘭

「いってきます！」

麗蘭が笑顔で振り向いて言う。彼女のこめかみにはチップを取り出した縫い目があった。

（終わり）

